

街に表情のある生活 (オマーン・サラールから帰国して)

昨年12月、3年間のオマーンから専門家派遣業務を終えて帰国した。現地ではゾファール州の砂漠の中に新しく設立された農業試験場で10人のカウンターパートと生活を共にしながら、栽培、調査などを行ってきた(AAI ニュース 7号 参照)。

現地での作業は、サラールから160km離れた農場に泊まり込み、昼夜を問わず業務が行われ、週末にサラールに帰り、皆家族と楽しむ。サラールの街では週末になると、喫茶店でゆったりとお茶を飲みながらチェスを楽しんだり、家族は山に出かけ適当な木の下でバーベキューを楽しんだり、海では子供たちがのんびり寝ころがっていたりしている。皆決められた時間や場所でなく、好き勝手に場所を選んで生活を楽しんでいる。また、当たり前にも身障者や知的障害の人々が街に出ている。それを皆がそれなりに受け入れて、それなりに助けたりしながら、決して特別な目で見えてはいないように感じる。自分を振り返ってみても、全く自然に食堂のオヤジに店の調子を聞いたり、街行く人から声をかけられれば、それなりに笑顔で対応し、返事する。

このようなオマーンでの生活に慣れ、帰国して感じたことはオマーン人の街の表情が非常に豊かである反面、日本ではオマーンと比較し、整然とした流れを感じながらも、なにか孤立感を感じる生活である。

東京の食堂に入ると決められた言葉と動作で注文を取られ、客はもくもくと出されたものを無言で食べ、ほとんど挨拶もせず帰って行く。電車の中では目の前に別の人立っても、相手から「すみません」と言われない限り詰めようとしな。周りの状況に関心も持たず、声をかけられても、まず警戒の目で見ながらその場から立ち去る。恐いのはその中に入った自分が、帰国するなり日本のこのような顔にどんどん変化してしまうことだ。

食堂での接客を画一化する利便性、効率化を追求するために有効である。また周りに関心を向けず限られた範囲で行動することは、極力失敗をなくし、揉め事を減らすことができる。大量の人口を抱える大都市では仕方ないことかもしれない。しかし、その代償として、人々は喜怒哀楽の表情を薄め、街の様子はどこへ行っても同じ表情で、かつその表情も豊かさに乏しいように感じる。

地域共同社会の重要性が言われている国際協力の中で、援助している国の表情が乏しく、援助される側の国の人々が生き生きしている。我々は個々の技術的な部門では、指導の立場にたてるが、彼らの生き生きとした表情を日本に技術指導してもらえないものだろうか。(財津)



神長大使閣下とカウンターパート達



サラール近郊の行楽地(潮の噴き上げ)